日本語の女性語について
―― 少女漫画に見る女性語の推移 ――

張　　夢　　圓

はじめに

日本語の特徴の一つは、性別によって使用する言葉に違いが見られることである。女性が主に使用する言葉を「女性語」、男性が主に使用する言葉を「男性語」と呼ぶ。中国語にも女性あるいは男性が好んで使う表現があるが、日本語のような「女性語」、「男性語」として分類できるものはほとんどない。

近年、様々な面で男女差が小さくなってきているのに伴って、言語の性差も縮小している。女性語は日常生活の会話でほぼ使われなくなり、衰退の傾向を示していると指摘される。一方、漫画、小説、ドラマなどのフィクションの世界では、女性語は重要な表現手段として多く使われ、人物像や会話の表現意図などと関わる。したがって女性語についての研究には、極めて重要な意義があると思われる。

筆者は昔から日本の漫画に興味があり、中国語に翻訳された作品を多く読んだが、日本語を学習してから原文で読み、初めてジェンダー表現、特に女性語という言語表象に気付いた。例えば女子校を舞台とする作品の中で、女子生徒の上品さは多く女性語の使用を通して表現されている。しかし、中国語には日本語のジェンダー表現に当てはまる表現が少ないので、ジェンダー表現を含む会話を中国語に翻訳する際に、日本語原文の雰囲気を再現することも、文末表現だけで発話者の性別をはっきりと示すことも難しい。このような他言語で再現しにくい日本語独特のジェンダー表現に興味を持ち、それについて詳しく考察することにした。

本稿では、漫画誌が大量に登場する1960年代から現在まで出版された少女漫画誌を対象とし、その中に登場する女性が使用する文末表現（主に終助詞）の使用回数をジェンダー表現の形式別で統計し、女性登場人物によるジェンダー表現の使用の推移を考察する。そして、その背景にある現実社会との関連を分析したい。

1. ジェンダー表現の定義と分類について

先ず、日本語におけるジェンダー表現の定義を概観したい。よく知られている

言語の中で、日本語は比較的に男女差が著しい言語とされている。日本語におけるジェンダー表現について、因京子（2003）は以下のように述べている。

日本語のジェンダー表現は、大まかには「発し手の性別を示唆する発話の特徴」と定義することができるが、一定の範囲が確定されているわけではない。最近の傾向では、伝統的に「男ことば・女ことば」と認識されてきた、終助詞（「～わ」「～ぜ」など）、美化語（「お～」など）、崩れの形式（「すごい⇒すげえ」など）などの言語形式だけでなく、断定を避ける、強調が多い等の言語表現の特徴や、話題提供を積極的に行なう、沈黙修復を頻繁に行なう等の発話行動の傾向など、言語行動に関わる全ての要素が分析の対象となってきている。

（因京子，『マンガに見るジェンダー表現の機能』，日本語ジェンダー学会，学会誌『日本語とジェンダー』第3号，2003年3月）

小川早百合（2006）は日本語における男女差を示す要素をまとめ、主なものとして以下の10要素を挙げている。

① 終助詞（文末表現）
② 呼称（一人称、二人称、三人称）
③ 音変化（促音化・長音化・音便化）
④ イントネーション
⑤ 語彙（副詞、「お」、～じゃん・奴・食うなど）
⑥ 文法（主語の欠如、格助詞の欠如・体言止め）
⑦ 敬語（丁寧さ）
⑧ パラ言語
⑨ 聞き手の性別（社会的地位）
⑩ その他（呼びかけ、言いよどみ、繰り返しの表現など）

この10要素のうち、終助詞は、男女差を顕著に表す要素として、どの研究者も認めている。

（小川早百合，『話しことばの終助詞の男女差の実際と意識―日本語教育での活用へ向けて―』，『日本語とジェンダー』日本語ジェンダー学会編，佐々木瑞枝監修，ひつじ書房，2006年6月10日）

上記の資料が示すように、日本語にはジェンダーを提示する要素が多く存在する。しかし、これらの要素を厳密に「女性語」と「男性語」に分けるのは難しい。この問題について因氏（2003）は以下のように述べている。

ある要素が男性的か女性的かは流動的な面があり、すっきり整理するのは難しい。時の経過に伴う変化、世代や個人による感じ方の違いという要因に加えて、特に日本語教育の観点から見て整理が難しいのは、同じ形式であっても文型や使用文脈によって性を示唆する程度が違うことがあるという点である。例えば「行くの？」という疑問文と「行くの↓」という平叙文では、

前者は特に女性的とは思われないが、後者はかなり女性的である。(中略)
このように、ジェンダー表現の範囲や種類を決めるには複雑な問題がある。
(因京子,『マンガに見るジェンダー表現の機能』, 日本語ジェンダー学会,
学会誌『日本語とジェンダー』第3号, 2003年3月)

男性語と女性語に対して、益岡隆志、田窪行則 (1992) は次のような性格付けを行っている。

一般に、女性的な表現は、断定を避け、命令的でなく、自分の考えを相手に押しつけない言い方をする、といった特徴を持つ。これに対して、男性的な表現は、断定や命令を含み、主張・説得をするための表現を多く持つ。
(益岡隆志, 田窪行則,『基礎日本語文法・改訂版』, くろしお出版, 1992年5月25日)

本稿では、丁寧表現、語彙、イントネーションなど解釈にゆれが大きい要素を観察の対象とせず、国立国語研究所による『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』(秀英出版, 1980年3月20日第7版発行) を参考として、「終助詞」或いは「終助詞的な用法がある」と定義される文末表現を対象とする。また、先行研究で見られたジェンダー表現の分類方法と基準を参考に、ジェンダー表現を表1のように分類する。

表1　ジェンダー表現の分類

種類	対象
女性的表現	女性語 (Female, F)：一般的に女性専用とされる表現
	女性的中性語 (Female Neutral, FN)：女性の使用が多いが、男性も使う表現
中性的表現	中性語 (Neutral, N)：性別的ではなく、回避的な表現
男性的表現	男性的中性語 (Male Neutral, MN)：男性の使用が多いが、女性も使う表現
	男性語 (Male, M)：一般的に男性専用とされる表現

2. 少女漫画誌に見るジェンダー表現の推移

本章では、女性登場人物の会話から終助詞を抽出し、それぞれの使用回数と使用率を統計し、60年代から現在までの少女漫画誌におけるジェンダー表現、特に女性語の使用の推移を観察したい。

従来のジェンダー表現をテーマとした研究の中で、異なる年代の漫画作品に使用されるジェンダー表現を対象とした研究もあるが、研究対象はほとんど研究者によって意識的に選ばれた各時代の代表的な人気作である。しかし、作品のジャンルや漫画作家個人の言語習慣などにより、同時代の作品でも表現が大いに異なる可能性がある。意識的に選ばれた少数の作品を比較するだけでは、全体の変化や傾向を把握しにくいので、本章では一冊に同時代の作品を複数掲載している漫画誌を対象とし1960年代から現在まで発行された漫画誌から、約10年間を単位として1冊ずつ取り上げ、その中に使われるジェンダー表現の使用回数や使用率

を統計して比較したい。

対象とする漫画誌は、集英社から発行されている少女漫画雑誌『別冊マーガレット』である。『別冊マーガレット』は、1963年に少女向けの総合週刊誌『マーガレット』の別冊として創刊され、1965年から月刊になり、主な対象読者層は中・高校生である。

今回の調査では、『別冊マーガレット』1967年10月号、1976年10月号、1985年10月号、1995年8月号、2006年10月号、2015年10月号、計6冊の漫画誌から、短いギャグ漫画と方言を用いる作品以外の掲載作品を取り上げる。各作品の主要女性登場人物（複数のシーンに登場する人物）の会話や心理活動の描写から、終助詞或いは終助詞的用法を持つ文末表現を抽出し、一冊の漫画誌全体の各文末表現の総使用回数を統計して分類する。さらに、各種類のジェンダー表現が一冊の漫画誌で使われる終助詞全体に占めるパーセンテージをグラフで表示し、ジェンダー表現の推移を観察して分析する。

2.1 『別冊マーガレット』におけるジェンダー表現の使用

前述の基準に基づき、先ず研究対象とされる『別冊マーガレット』各冊の掲載作品数と主要女性登場人物数を統計し、表2で提示する。

表2のデータを見て分かるように、『別冊マーガレット』一冊の掲載作品数とページ数はこの48年間の間で明らかに増加傾向を示し、2015年10月号の総ページ数は1967年10月号のほぼ2倍である。

表2 『別冊マーガレット』掲載作品数と女性登場人物数

	1967年 10月号	1976年 10月号	1985年 10月号	1995年 8月号	2006年 10月号	2015年 10月号
掲載作品数	9	9	9	11	12	15
女性登場人物数	31	26	19	24	33	28
総ページ数	354	440	492	538	566	702

それに対して、紙面の構成を見ると、全体的な傾向として、一ページを埋める文字量が比較的に少なくなり、人物の台詞に言いさし表現が増え、コマ割や吹き出しの配置形式がより自由になり、画面のぎっしりとした窮屈感が減少していることが分かる。当然作家によって表現手法が異なるので、全ての作品が前述の傾向を示すわけではないが、多くの作品でそのような変化が見られる。

この変化は、漫画が文学に従属する文化表象から自立した結果だと考えられる。米澤嘉博（2007）、藤本由香里（2008）がまとめた少女漫画史によると、少女漫画が本格的に始動し始めたのは第二次世界大戦後のことである。1953年に手塚治虫による「ストーリー少女マンガ第1号」とされる『リボンの騎士』を始め、少女漫画にはストーリー漫画を導入した。この頃から、少女雑誌において従

来の絵物語などを押しのけて少女漫画の比重が高まっていった。しかし、まだこの時期の少女漫画のモデルの多くは少女小説だった。また、少女向けの作品であるが、そのほとんどは男性漫画家によって描かれていた。

朝鮮戦争が終わると、神武景気が消費時代の幕開きを告げた。人々は娯楽を求め、グラビア等の視覚メディアが娯楽の中心となった。カストリ雑誌から大判の豪華な雑誌に移行する現象は少女雑誌にも及んでくる。その大きな紙面を埋めるために、漫画の需要は益々増大していき、以前には少女雑誌の一部分でしかなかった漫画が雑誌の殆ど全てを占めるようになり、新創刊が次々と生まれた。雑誌は大量のストーリー漫画家を求め、手塚の影響を受けて育った第二世代の若手漫画家達はこの頃どっと登場することになった。女性漫画家が増え、単行本作家も増え始めていた。

雑誌という媒体の量の増大は作品の描写に用いるコマやページ数の増大でもあった。それとともに画面の展開手法がより流れるようなものへと変化し、「読む漫画」から「見るマンガ」へと変化したとも言われた。また、表現技法だけではなく、漫画における言語表現も共に変化していく。

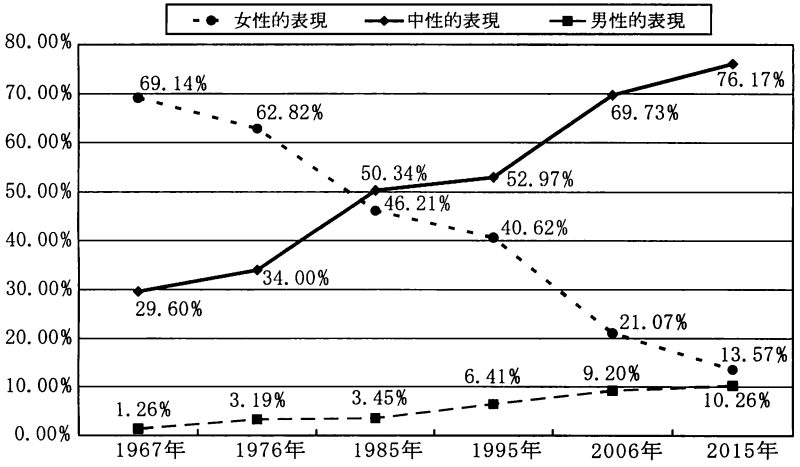
次に、女性登場人物による終助詞の使用状況の変化を観察したい。対象作品から抽出された計 36 種の終助詞と終助詞的用法を持つ文末表現を分類し、それぞれの使用回数を表 3 で提示する。『別冊マーガレット』における各種ジェンダー表現の使用率にどのような変化があるかを観察するために、折れ線グラフを用いて図 5 で使用率の推移を示す。

表 3　女性登場人物による終助詞使用回数一覧

	終助詞	1967年10月号	1976年10月号	1985年10月号	1995年8月号	2006年10月号	2015年10月号
女性的表現	かしら	28	19	6	5	3	1
	こと	1	2	0	0	0	0
	て・って（質問）	3	0	0	0	0	0
	ね（体言/ナ形容詞基本形＋ね）	33	36	4	6	3	3
	の（断定）	40	106	33	46	16	31
	のね	27	18	8	8	0	0
	のよ	78	46	34	15	2	2
	もの	12	13	2	4	2	1
	よ（体言/ナ形容詞基本形＋よ）	101	67	44	23	2	1
	よね	0	21	7	14	20	36
	わ	161	113	25	17	12	3
	わね	25	17	10	1	2	0
	わよ	29	16	28	32	9	0
	合計使用回数	547	474	201	171	71	78
中性的表現	か	20	40	16	18	18	46
	かな	1	11	12	18	21	53

中性的表現	から	5	14	15	6	10	24
	け	2	2	1	3	2	1
	けど・けれど	9	11	10	9	9	13
	くせに	1	4	0	1	1	2
	てね・でね（依頼）	2	3	6	1	1	2
	てよ・でよ（勧誘・依頼・命令）	5	9	12	4	5	10
	って	14	8	6	17	7	10
	ね	39	43	45	36	35	72
	の（質問）	83	53	39	38	45	55
	のに	19	14	5	10	10	12
	もん	6	11	16	3	7	14
	よ	29	33	36	59	64	124
	合計使用回数	235	256	219	223	235	438
男性的表現	い	0	0	0	0	2	2
	さ	3	4	1	2	1	2
	ぜ	0	0	0	5	0	0
	ぞ	0	0	0	1	2	0
	な・なあ（感動・詠嘆・断定）	6	17	13	16	20	54
	な（命令・禁止）	1	1	0	1	1	0
	なよ	0	0	0	1	1	0
	や	0	2	1	0	3	1
	よな	0	0	0	1	1	0
	合計使用回数	10	24	15	27	31	59
終助詞合計使用回数		794	753	435	451	337	575

図5　各種ジェンダー表現の使用率の推移



（ジェンダー表現の使用率＝各種ジェンダー表現の合計使用回数÷終助詞の合計使用回数）

図5を見て分かるように、1967年の女性的表現の使用率は69.14%であり、全体の6割以上を占めたが、年を経るごとに減少傾向を示し、2015年は13.57%と低い数値を示した。それに対して、中性的表現の使用率は増加傾向を示し、1967年の29.60%から2015年の76.17%まで上がった。男性的表現の使用率も増加傾向を示し、1.26%から10.26%まで上がったが、数値の増加幅は中性的表現ほど大きくなく、48年の間で終始最も低い使用率を保っている。女性人物の会話における女性的表現の減少と中性的表現、男性的表現の増加が、言語による男女差の縮小を反映していると思われる。

2.2　女性的表現の推移について

次に、各女性的表現の年ごとの平均使用回数（合計使用回数÷女性登場人物数）を計算して棒グラフで表示し、それぞれの使用状況の変化を観察したい。本稿では紙幅の制限上、グラフを全て提示することができないので、各表現の使用状況についての詳しい分析は別稿に譲る。

『別冊マーガレット』における女性語の平均使用回数を比較した結果、女性語は女性登場人物の言葉から消えていくという現状が分かった。女性的表現の使用回数は全体的に減少傾向を示しており、特に「かしら」、「わ」のような典型的な女性語は、図6と図7が示すように、女性に使われなくなっている。

図6　「かしら」の平均使用回数

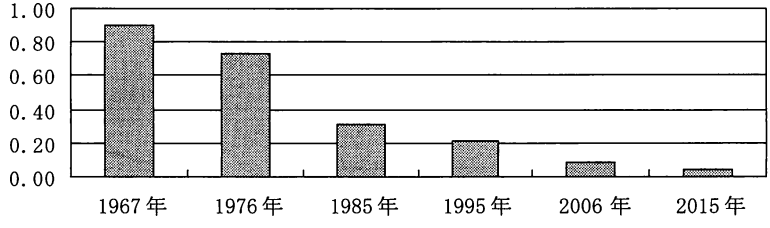
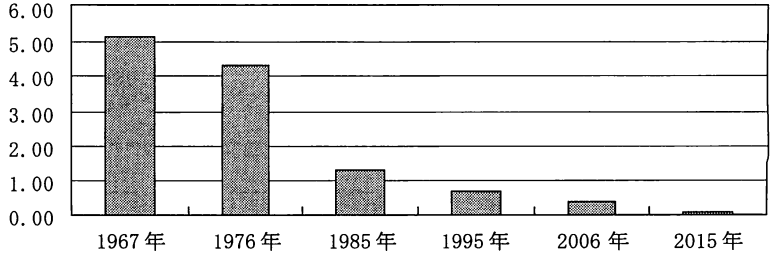
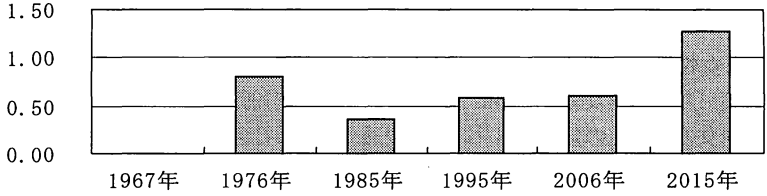


図7　「わ」の平均使用回数



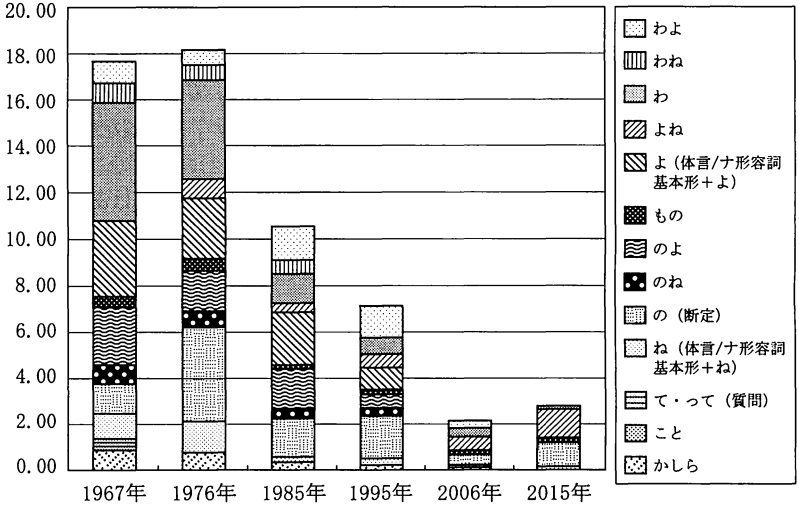
「よね」のように近年増加傾向を示し、男女共に使われるようになった表現もあるが、これらの表現の使用の増加は典型的な女性語に取って代わるようなものとして入れ替わった結果だと考えられる。また、使用回数が減少傾向を示す女性的表現の中で、1967 年、1976 年では使用回数が多く、それ以降使用が急激に減少していく表現が多い。

図 8 「よね」の平均使用回数



ここで、女性的表現全体の平均使用回数の変化を把握するために、前述の表現それぞれの平均使用回数を年代別で積み上げ棒グラフで表示し、図 9 で示す。

図 9 女性的表現の年代別平均使用回数



積み上げ棒の高さの変化を観察して分かるように、女性的表現全体は 1967 年号、1976 年号で共に多い平均使用回数を見せているが、1985 年号での使用回数が急激に減少し、1985 年号の棒の高さは 1976 年号のほぼ半分になっている。さらに、2006 年と 2015 年では 3 回も満たさない少ない平均使用回数を見せている。

藤本氏（2008）が言うように、「長いことマンガを読み続けていると、それが

いかに敏感に世の中の動きを反映しているかに驚かされる」。現実世界の生活実態、流行文化、価値観などはフィクションである漫画に反映され、同時に漫画は様々な面で読者に影響を与え、漫画は現実社会と緊密に繋がっているのは確実である。それは言葉の面においても同じである。漫画の言葉は現実世界で実際に使われる言葉と一致しないところが多いが、異なる時代の漫画家が選んだ言葉は確かに時代と共に変化していく。グラフが示す漫画における女性語使用の激減も、その背景には必ず現実社会の大きな変化があると考えられる。

2.3　女性語の衰退の社会背景について

言葉における男女差の縮小について、太田淑子（1992）は「その背景には、戦後の男女の学歴差の縮小，男女同権の浸透，女性の社会進出等々の社会背景の変化があり，ことばの性差の変化と密接に関係していることは否めない」と述べている。女性語使用の減少、特に 70 年代～ 80 年代のあたりでの激減と現実社会の関係を究明するために、女性をめぐる日本の社会環境の変化を考察したい。

2.3.1　女性の教育について

先ず、教育面での変化に注目したい。金水敏（2003）によると、近代的な「女性語」や「お嬢様ことば」の起源とされるのは、明治時代に生まれた「てよだわ言葉」である。現在上品な言葉遣いとしてプラスの評価を与えられることの多い女性専用表現であるが、このような表現が現れはじめた明治 20 年頃から 40 年代まで、指導的な立場にあった人々の言説では、品格のない乱暴な表現として排斥されていた。1882 年の東京女子師範学校への付属高等女学校設置を始めとし、各地に続々と高等女学校が設立され、日本に教育を受けた若い女性のコミュニティが生まれた。当時、高等女学校に娘を通わせることが出来る家庭はある程度の収入と社会的地位が必要とされ、その点で女学校に娘を通わせることは、ステータスの証ともなった。このようなステータスの証としての女学校の位置付けやが、いわゆる「お嬢様」の共同幻想を生んだ。

本来悪評された「てよだわ言葉」は「女学生言葉」として広まった。女学校文化を象徴する聴覚的要素として、東京から発生した女学生言葉は女学校を媒介として着実に全国に拡散して普及していった。また、小説、女性雑誌などでは、女学生以外の女性による女学生言葉の使用が見られ、女学生言葉は女学校という枠をはみ出て、一般的に「女性語」化しつつあった。

しかし、1945 年敗戦以降、社会の構造が急速に変化していき、教育方針の革新によって女学校という制度はなくなった。ここで当時の歴史的概観を引用する。

> 敗戦直後の 1945 年、文部省は、国体護持・平和国家建設・科学的思考を強調した「新日本の建設教育方針」を公表したが、GHQ の五大改革指令の学校教育の自由主義化により、1946 年、大学入学選抜要綱を通達し、女子

及び専門学校卒業者の大学入学を認可。1947年、教育基本法・学校教育法を公布、6・3・3・4制、男女共学を規定、津田塾・日本女子大など5女子大学を含む12の新制大学を認可。（中略）高校進学率は76.7%に伸び、男女ほぼ同率になり、東京では初めて90%突破の91.6%になった。（中略）男子のみしか受入れなかった東京商船大学が女子受験を認め、海上保安学校、航空管制官・気象大学校等12種の国家公務員採用試験女性に開放と、次第に女性への門戸は広がってきている。

（平野敏政，平井一麥，『女性をめぐる社会的環境の歴史的展開――女性史年表の記載項目から――1』，帝京社会学第23号，2010年3月）

こうして男女共学制度の決定、また1947年に華族制度の廃止により、「お嬢様」の共同幻想を支える制度が崩壊してしまった。勿論、資産や家柄がある家庭に生まれた令嬢は依然として登場する。例えば、『別冊マーガレット』1967年10月号掲載の西谷祥子による『レモンとサクランボ』には、ヒロイン礼子が、お金持ちのお嬢さんであるクラスメート「さくら」が軽々とタクシーを呼ぶのを見て「これだから金もちとはつきあいずらい」と心で思ったシーンがある。しかし、生まれ育ちで人の階級を区別する制度はもう存在しない。「女子教育」という、かつて上流の象徴とされた特権が次第に価値を失った結果、その象徴でもある女性語もだんだん追随、使用されなくなっていく。今回の調査で、典型的な女学生言葉とされた「こと」「て・って（疑問）」の使用例は1967年号と1976号でそれぞれ計3回の使用しか見られない。

2.3.2　女性の地位向上と社会進出について

戦前の日本社会で、女性に個人としての価値と個性は重視されず、「良妻賢母」として家庭で夫を支え、跡継ぎとなる男児を産み育てることが女性の義務とされていた。「家」制度に縛られ、男性戸主に従属する女性に求められたのは柔らかい物腰であり、率直に自分の意見を言うのは良しとされなかったので、意見や詠嘆を表す時に女性語を用いて口調を和らげる必要があった。

戦後、男女平等の精神を盛り込んだ日本国憲法が1947年5月3日に施行され、民法・戸籍法が改正され、結婚及び離婚の自由と平等は確保され、「家」制度も廃止された。女性の解放と地位向上、女性差別の問題に取り組む運動が展開していく。1979年に、第34回国連総会で『女子差別撤廃条約』が採択され、この条約は1985年に雇用に関して男女の差別的な処遇を禁止する『男女雇用機会均等法』が制定された後、日本で批准された。現実社会の女性をめぐる種々の変化は、漫画の世界にも及んでくる。

藤本氏（2008）の漫画論によると、初期の少女漫画のヒロイン達は「お嫁さん」以外のところで夢を持とうとすれば、先生、看護婦という女性の二大伝統職業を除いては、女優、歌手、モデルなど並外れた個性と才能で勝負する「選ばれた」女性になる以外に道はなかったという。そして、70年代後半にさしかかっ

て、スタイリストという職業が登場してきたあたりから、「才能」より「センス」で勝負する職業が選択肢に加わりはじめ、1986年の『男女雇用機会均等法』施行以降、会社勤めのごく普通のＯＬが仕事に頑張る姿を描いた作品が登場してきたと指摘する。この均等法について、藤本氏は「ザル法と言われた均等法だが、ことコミックに関するかぎり、この法律が、社会や女性の意識を仕事に向けさせることにあずかって力あったことは疑いがない」と評価し、その証拠として、刀根夕子『ＯＬグラフィティ』、つじいもとこ『フレバリー・ジャンプ』、深見じゅん『悪女』などといった「ＯＬ仕事コミック」の傑作はすべて、1987年末から1988年初頭にかけて相次いで連載開始されていたことを挙げる。

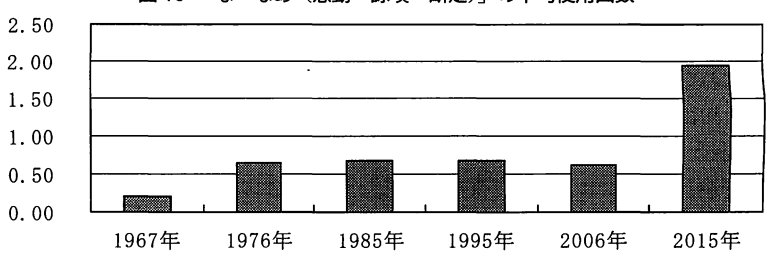
女性の社会進出がさらに進み、漫画における女性登場人物の職業も多様化していく。1998年から連載を始めた逢坂みえこによる『火消し屋小町』の中で、消防士という従来男性職のイメージが強い職業を務める女性が主人公として登場し、女性は初めて火災現場に入った放水要員として描かれた。

現在の日本社会ではまだ完全な男女平等を実現したとは言えないが、女性の地位向上につれて、女性が能力を発揮できるようになり、家庭や男女関係における男女の対等、また愛情や性について個人としての選択が重視されるようになっていく。その結果、女性は自分の意見や主張をはっきりと言えるようになり、女性語で言葉を和らげる必要がなくなっていき、女性語使用の衰退を導いた。

2.4　中性的表現と男性的表現の使用について

女性的表現が衰退していくのに対して、中性的表現と男性的表現の使用率は全体的に明らかな増加傾向を示している。中には感動・詠嘆・断定を表す終助詞「な」のように、本来一般的に男性的表現とされたが、図10に示すとおり、近年では女性による使用が急増したため、現在しばしば中性的表現と定義される形式もある。

図10　「な・なあ（感動・詠嘆・断定）」の平均使用回数



中性語と男性語の使用によって女性人物の言語表現が一層自由で豊かになり、話し言葉の選択肢が増えていく。ここで二つの作品から取り上げた会話例を見てみよう。

会話 1

蒼子：見てたよ／きみ／本もほうりだして副会長をピンチから救ったのだねぇ

真希子：おおげさね／保健室へつれてっただけよ

蒼子：しかし／衆人環境の場でああも行動できるものではない

真希子：だって／けがしてたのよ！血が流れてて！

蒼子：ふふ…男の子ってよわいんだよ／女の子のやさしさに／周囲にこれみな敵みたいなときなんか／もうころっとまいっちまう

（市川ジュン，『花の中へ』電子書籍版，P20-21，eBookJapan，2013 年 10 月 4 日）

会話 2

真希子：蒼子が革命的思想のもちぬしだったなんて／ずっとしらなかったわ

蒼子：そうよ／わたしそうじゃなかったもの

真希子：でもあなた／いま同志なんでしょう／思想も関係なしに彼をてつだっているだけなの？

蒼子：…克己にほれたとき／彼のすべてにほれこむことになるだろうと思った…真希子／女の子ってね／男の子にほれると／彼とまったく同じように生きたいとただそれだけを思いこむのよ／じぶんがいままで生きてきたものなんか／なにもかもすてたっていいのよ／新しく彼と同じ知識や習慣を身につけて生きていこうと思うものなのよ

真希子：…それが男ことばで校則やぶりのあの蒼子のせりふ？

蒼子：そう／そりゃ 1 人のこらず女の子はこうなのだ――とはいわないけどね／わたしはそういう女――

（『別冊マーガレット』1976 年 10 月号，市川ジュン，『花の中へ』，P92-93）

会話 1、2 は市川ジュンによる『花の中へ』のヒロイン真希子と友人蒼子の会話である。会話 1 は蒼子の初登場のシーンにおける会話である。真希子は「～わ」、「体言＋ね」、「体言＋よ」、「～のよ」等の表現を多用し、言葉遣いは非常に女性的である。この時点の蒼子は「だね」、「だよ」という中性的、男性的な表現と「ちまう」というくだけた表現を使用し、真希子に対して「きみ」という男性のほうが多用する二人称代名詞を使用する。会話 1 のシーンで、蒼子は新学期の初日に校則を破ってわざとセーラー服を着て登校し、男子生徒志賀克己をかばった真希子を揶揄し、男女関係について「男の子ってよわいんだよ／女の子のやさしさに」というどこか上から見たような発言をする。蒼子は行動の面も言葉遣いの面においても、「女の子らしさ」という社会的規範を破ろうとしている。しかしストーリーの後半で、蒼子は学校の受験体制に反発して行動する革命的思想の持ち主である克己の「同志」として、二人で高校をやめて同棲生活を始めた。学校で男性語を使用する蒼子は、克己との同棲生活の中で「すっかり奥さんというふんいき」になり、克己に対して献身的姿勢を見せており、言葉遣いも女性的に

なった。

会話3

種：隆司のこと／好きだよ／あたし

隆司：……んじゃ／アホな事ばっか考えんなよ！！

種：アホじゃないもん／本気だし（中略）好きでもーやりたい事はやりたい事で大事じゃん？

隆司：それは俺より旅に出る方が大事って事だろ

（『別冊マーガレット』2006年10月号，永田正実，『恋愛カタログ』，P223-224）

会話4

種：あたしもあんたが好きだって言ってんだろが／くそハゲ

隆司：信用できんわ

種：しろ／ハゲ

隆司：じゃあ／旅はあきらめろ

種：イヤ。

（中略）

隆司：俺だって待ってらんねえよ／悪いけど俺はまだおまえにそこまで好かれてる自信ないからな／不安で淋しくて浮気する／絶対してやる／する！！

種：……すんの？じゃあ／帰るたびに奪いかえさなきゃいけないのかい／あたしも大変だな

（『別冊マーガレット』2006年10月号，永田正実，『恋愛カタログ』，P240-243）

会話3、4は永田正実による『恋愛カタログ』の登場人物花本種と彼氏の隆司の会話である。種は高校卒業の後、大学進学も就職もせずに旅に出ると決めたが、二人の関係に自信のない隆司は種を止めるために浮気宣言をした。従来の作品では男が旅に出て女が故郷で男を待つという設定が少なくないが、この作品では逆に女性が旅に出る存在となっている。必死に自分を止めようとする隆司のわがままに向かって種は動揺せず、自分の主張を貫こうとする。このような種の言葉には乱暴な表現が多く、男性的な言葉遣いによって能動的で自己主張の強いイメージを示している。

同じ高校3年生であるが、違う時代に生きる蒼子と種の行動が示す二人の性格、観念、欲求、更に男女関係における二人の地位の違いは、二人の言葉にも反映されている。

終わりに

60年代、70年代の漫画作品では、女性登場人物が女性語を話すことが規範とされ、女性語の使用に大きな個人差が見られず、女性語は一般的に女性性の象徴とされ、「上品」、「優しい」、「か弱い」などのイメージを持っている。しかし、近年の作品では、女性語が示す登場人物の属性は必ずしも「女性らしい」わけで

はない。女性語を自然に話している人物の多くは母親、教師などの年上の女性であり、女性語は「年上らしさ」の象徴として機能する。また、若い人物の発話では、時々強気な人物による女性語の使用が見られる。発話者は年上らしさを取り込むことにより、聞き手より目上であるように見せる。

このような、場面によって意図的に使われる女性語は、女性らしさ以外のイメージを持っており、普段と異なる自分を演出するための装置だと考えられ、新たな機能を生み出している。女性語の機能の変化については、今後の研究で引き続き具体的な会話例を見ながら分析していきたい。

参考文献

・『別冊マーガレット』1967年10月号，1976年10月号，1985年10月号，1995年8月号，2006年10月号，2015年10月号，集英社
・国立国語研究所，『現代語の助詞・動詞―用法と実例―』，秀英出版，1980年3月20日
・益岡隆志，田窪行則，『基礎日本語文法・改訂版』，くろしお出版，1992年5月25日
・太田淑子，『談話にみる性差の様相：終助詞を中心として』，横浜国立大学教育紀要32，329-342，1992年10月31日
・金水敏，『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』，岩波書店，2003年1月28日
・因京子，『マンガに見るジェンダー表現の機能』，日本語ジェンダー学会，学会誌『日本語とジェンダー』第3号，2003年，http://www.gender.jp/journal/no3/no3_2.html
・小川早百合，『話し言葉の男女差　―定義・意識・実際―』，日本語ジェンダー学会，学会誌『日本語とジェンダー』第4号，2004年，http://www.gender.jp/journal/no4/b_ogawa.html
・日本語ジェンダー学会編，佐々木瑞枝監修，『日本語とジェンダー』，ひつじ書房，2006年6月10日
・米沢嘉博，『戦後少女マンガ史』，筑摩書房，2007年8月10日（1980年1月新評社刊）
・藤本由香里，『私の居場所はどこにあるの？少女マンガが映す心のかたち』，朝日新聞出版，2008年6月30日
・山中靖子，『現代日本語の性差に関する研究―文末表現を中心に―』，東京女子大学言語文化研究17，P87-100，2008年
・夏目房之介，竹内オサム，『マンガ学入門』，ミネルヴァ書房，2009年4月20日
・平野敏政，平井一麥，『女性をめぐる社会的環境の歴史的展開――女性史年表の記載項目から――1』，帝京社会学第23号，2010年3月
・有泉優里，『会話文末における「男ことば」と「女ことば」の分類：ジェンダー識別傾向とジェンダー特異性を指標として』，日本語ジェンダー学会，学会誌『日本語とジェンダー』第13号，2012年，http://www.gender.jp/journal/no13/12ariizumi.html

・「別冊マーガレット-Wikipedia」，https://ja.wikipedia.org/wiki/ 別冊マーガレット，最終更新 2015 年 11 月 15 日 23:51